厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業

若者等におけるHIV感染症の性感染予防に関する学際的研究

Socio-Epidemiological Studies on HIV Prevention for Young People

平成１８年度　総括・分担研究報告書

平成１９年 ３月
(2007)

主任研究者　木原　雅子

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

平成１８年度厚生労働省若者等ＨＩＶ社会疫学研究班構成名簿

(注)氏名横の*印は所属グループが複数の場合

2007年3月現在

氏名	所属	職名	〒	住所	電話	FAX	e-mail
若者予防グループ							
班長　木原　雅子＊	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	助教授	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	okmasako@pbh.med.kyoto-u.ac.jp
木原　正博＊	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	教授	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	poghse@pbh.med.kyoto-u.ac.jp
Sh.Mortazavi	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野		606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	
木原　彩	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野		606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	
Saman Zamani	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	助手	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	
国友　隆一	(株)ベストサービス研究センター	取締役社長	101-0062	東京都千代田区神田駿河台2-1-19	03-3294-1007	03-5280-9269	
滞日外国人グループ							
岩木　エリーザ	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター	専務理事	241-0821	横浜市旭区二俣川1-82-21	045-360-2094	045-360-2093	elisaai@beige.ocn.ne.jp
木原　雅子＊	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	助教授	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	okmasako@pbh.med.kyoto-u.ac.jp
小堀　栄子	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	客員研究員	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	
小谷　京子	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター		241-0821	横浜市旭区二俣川1-82-21	045-360-2094	045-360-2093	
リマ アラウージョ	Grupo de Incentivo a Vida、AFXB　ブラジル	理事	241-0821	横浜市旭区二俣川1-82-21	045-360-2094	045-360-2093	
下郷　さとみ	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター		241-0821	横浜市旭区二俣川1-82-21	045-360-2094	045-360-2093	
野沢　美奈	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター		241-0821	横浜市旭区二俣川1-82-21	045-360-2094	045-360-2093	
小貫エリゼッテ	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター		241-0821	横浜市旭区二俣川1-82-21	045-360-2094	045-360-2094	
津島真利絵	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター		241-0822	横浜市旭区二俣川1-82-22	045-360-2095	045-360-2095	
柴田イナシオ	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター		241-0823	横浜市旭区二俣川1-82-23	045-360-2096	045-360-2096	
山形　エレーナ	特定非営利活動法人CRIATIVOS-HIV・STD関連支援センター		241-0824	横浜市旭区二俣川1-82-24	045-360-2097	045-360-2097	
木原　正博＊	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	教授	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	poghse@pbh.med.kyoto-u.ac.jp
PCMグループ							
藤原　良次	りょうちゃんず	代表	737-0003	広島県呉市阿賀中央6丁目6-26-403	090-2805-9389		rarawijuf@nifty.com
早坂　典生	りょうちゃんず		980-0874	宮城県仙台市青葉区角五郎1-5-30	090-7327-6122		faya-n@mtf.biglobe.ne.jp
橋本　謙	北海道大学病院		060-8648	札幌市北区北14条西5丁目	011-706-7025		
長谷川博史	日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンッププラス		164-0014	東京都新宿区内藤町1-7ホワトクビル402	03-5367-8558		
矢島　嵩	ぷれいす東京		169-0075	東京都新宿区高田馬場4-22-46ザ・テラス304	03-3361-8964		
木原　雅子＊	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	助教授	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	okmasako@pbh.med.kyoto-u.ac.jp
木原　正博＊	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	教授	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	poghse@pbh.med.kyoto-u.ac.jp
HIV感染者グループ							
井上　洋士	三重県立看護大学成人看護学	助教授	514-0116	三重県津市夢が丘1丁目1-1	059-233-5628	059-233-5628	yoji.inoue@mcn.ac.jp
村上　未知子	東京大学医科学研究所附属病院	師長	108-8639	東京都港区白金台4-6-1	03-3443-5697		odamari@tky2.3web.ne.jp
岩本　愛吉	東京大学医科学研究所先端医療研究センター	教授	108-8639	東京都港区白金台4-6-1	03-5449-5359	03-5449-5427	
関　由起子	埼玉大学教育学部学校保健学講座	助教授	338-8570	埼玉県さいたま市桜区下大久保255	048-858-9536	048-858-9536	
大野　稔子	北海道大学医学部附属病院		060-8648	北海道札幌市北区北14条西5丁目	011-716-1161	011-716-3960	
有馬　美奈	東京都保健医療公社荏原病院		145-0065	東京都大田区東雪谷四丁目5番地10号	03-5734-8000		
市橋　恵子	訪問看護ステーション堂山	所長	530-0026	大阪府大阪市北区神山町9-28-402	06-6130-7567	06-6130-7568	
山元　泰之	東京医科大学臨床検査医学	講師	160-0023	東京都新宿区西新宿6-7-1	03-3342-6111	03-3340-5448	
平野　真紀	三重県立看護大学成人看護学	助手	514-0116	三重県津市夢が丘1丁目1-1	059-233-5628	059-233-5628	
細川　陸也	三重県立看護大学		514-0116	三重県津市夢が丘1丁目1-1			
木原　正博＊	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	教授	606-8501	京都市左京区吉田近衛町	075-753-4350	075-753-4359	poghse@pbh.med.kyoto-u.ac.jp

目　次

Ⅰ.総括研究報告：若者等におけるHIV感染症の性感染予防に関する学際的研究 ------ 木原雅子 ------ 1

Ⅱ.分担研究報告

1.若者予防グループ：日本の若者に対するHIV予防介入に関する研究 ------ 木原雅子 ------ 9

1．観察的研究：1stオーディエンスおよび2ndオーディエンスに対する横断調査

1-1：1stオーディエンスに対する調査

① A県中学生/高校生に対する性意識調査（A県教育委員会と共同研究） ------ 木原雅子・他 ------ 13

② B県小学生に対する性教育に関する意識調査（B県教育委員会と共同研究) ---- 木原雅子・他 ------ 82

1-2：2ndオーディエンスに対する調査

① 養護教諭に対する全国保健室調査 ----- 木原雅子・他 ------ 133

② A県・B県の保護者に対する意識調査（A/B県教育委員会と共同研究） ----- 木原雅子・他 ------ 160

2. 実験的研究：中高生に対するHIV予防介入研究（学校ベース） ------ 木原雅子・他 ------ 181

3. 添付資料 ------ 木原雅子・他 ------ 216

2.滞日外国人グループ：滞日ブラジル人若者を対象とした予防介入に関する研究報告 ------ 岩木エリーザ・他 ------ 289

3.HIV感染者グループ：HIV感染者のセクシュアルヘルスとSTI/HIV予防行動への支援体制のモデル開発に関する研究 ------ 井上洋士・他 ------ 335

4.ＰＣＭグループ：HIV陽性者支援として個人予防介入方法としてのプリベンション・ケースマネージメント（PCM）・サービスの実践研究 ------ 藤原良次・他 ------ 363

Ⅰ　総括研究報告

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
平成 18 年度総括研究報告書

若年者等における HIV 感染症の性感染予防に関する学際的研究

主任研究者：木原雅子（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野）

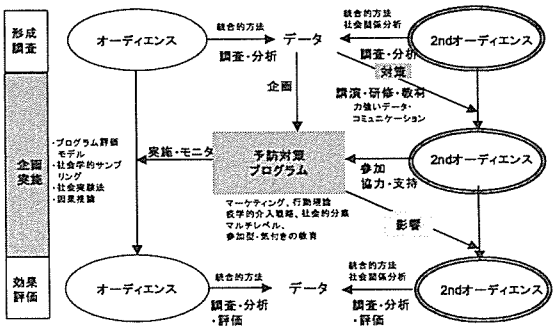
1.研究目的

社会疫学という学際的手法に基づいて、わが国の社会文化に適した若者や HIV 感染者等に対する予防介入モデルを開発・普及を行い、適切な行政施策の発展に資する。

2. 研究方法と３．研究結果

（1）日本人の若者の予防介入研究

社会疫学的諸手法(質・量手法の併用、マーケティング、行動理論、教育理論、社会実験法等、右図)を駆使して開発した若者予防介入モデル(WYSH モデル)は、新しい予防モデルとして高い評価を獲得し、平成 16 年度から厚労省青少年エイズ対策事業による研修が開始され、また文科省の中央研修に採用されるに伴い、極めて多数の学校、自治体から研究参加の依頼が寄せられるようになった。そうした状況を背景に、モデルの進化と多様化、全国普及を目的に以下の研究を実施した。



1）**観察的研究**：予防介入の設計とエイズ教育普及のために必要な情報を収集する目的で（1st）オーディエンス(若者)と 2nd オーディエンス(保護者・養護教諭)を対象に以下の横断調査を当該教育委員会と共同で実施した。

①中高生の意識行動調査：A 県下全域から割り当て法で抽出した 48 校の中学 1-3 年生 13,116 名、22 校の高校 1-3 年生 14,672 名を対象に、性行動、性意識、知識及び人間関係等について調査を行った。中学 1 年生から高校 3 年生までを統一した方法で調査した初めての調査である。その結果、性行動、性意識、性情報暴露等について、低学年ほど（中学校低学年）女子が男子を上回るあるいは男女差が喪失するなど、女子の活発化が進行している事実が示された。②小学生の性教育に関する希望調査：小学生に適切な予防教育のあり方を探索する目的で、B 府全域から割り当て法で選ばれた 33 校の小学生 7,079 名を対象に性教育に対する希望等についての質問紙調査を実施した。その結果、性教育への羞恥心や抵抗感、小学校における性教育/エイズ教育に起因する様々な誤解の存在が明らかとなった。③保護者の意識調査：予防教育の 2nd オーディエンスとして重要な保護者の性教育に対する希望、子どもの性行動への意識、HIV/STD 関連知識について、A 県の小学生の保護者 5,785 名、中学生の保護者 3,749 名、高校生の保護者 3,124 名を対象に質問紙調査を行った。その結果、HIV/STD 関連知識に関して保護者自身はある程度の知識は有するが、地元情報/性感染症基礎知識の不足等、知識に偏りあることが示された。また子どもに対しては、喫煙行為、飲酒行為、性行為の中で、性行為に対する容認意識が最も高く、子どもの性行為に対する保護者の意識の変化が示された。④保健室調査：保健室における生徒相談の実情と有効な個別指導法を開発する目的で、全国から無作為抽出した国公立の小中高 3000 校に対して、生徒からの相談内容や抱える問題点について、自由記述を含む質問紙調査を実施し、901 校(30%)から回答を得た。さらに 4 県に対して全数調査を行い、1943 校中 958 校(49.4%)から回答を得た。その結果、保健室の極めて多忙な実態や、養護教諭複数配置の不徹底、学内外の連携不備など、相談業務を困難にする諸要因、性の相談内容

の深刻さ等、対応をめぐる様々な困難の存在が明らかになった。

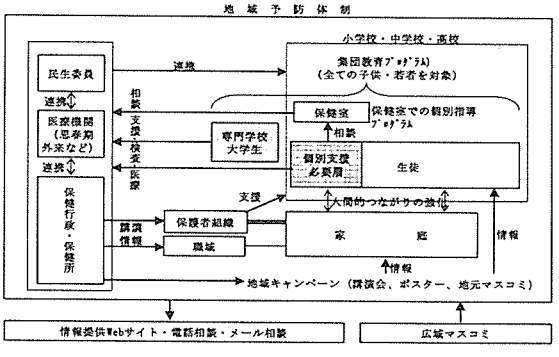
2）**予防介入研究**：①中学生・高校生への予防介入研究:WYSH モデルの全国普及と進化を図るため、青少年エイズ予防対策事業と連動し、全国中高生予防介入の研修と効果評価を実施した。希望校から、26 都道府県の中学 88 校（注：昨年度の 3 倍, 8,044 名）と高校 52 校（注：昨年度の 2 倍）7,901 人を選びプロジェクトを実施した。今年度は、全国 3 箇所で研修を実施した(研修者総数は 317 名)。事前調査(7 月)後、研修(8 月)を行った。介入期間(9-12 月)の後、事後調査(12 月)を行なった。介入には、独自開発したビデオ（クラミジア/HIV、中絶、いずれも CG にて自主開発)、地元情報を取り入れさらに改訂を加えたパワーポイント、地元情報に基づくパンフ/ポスター等の教材を使用し、教材の組み合わせによる中学生用と高校生用授業プログラムを開発した。今年度は性行動の関連要因の分析結果に基づき、コミュニケーション能力の向上、人間関係の大切さも強調する内容とした。参加校には実際に実施した予防介入内容に関する質問票調査を行い、実際の予防介入内容によって群別して、知識、リスク認知、性意識、性行動の変化を比較した(比較群付前後比較試験)。その結果、中学生では、WYSH 教育実施群では非実施群に比べ、全てで昨年以上の顕著な効果が確認された。高校生では、知識、リスク認知は大きく改善したが、性意識、性行動の改善は、介入前の性意識や予防行動の程度、異質プログラムの併用、予防教育実施時間の短さ等によって、影響を受けることが示された。

②小学生の予防プログラムのための予備調査：コミュニケーション能力を高めるための予備介入研究を2年生56名と6年生48名を対象に実施した。

（2）**滞日外国人の若者の予防介入研究**

社会疫学的手法により滞日ブラジル人の若者の予防対策を確立する目的で研究を開始した。形成調査として以下の調査を実施した。①若者に対する質的調査:ブラジル人学校４校（群馬県、愛知県）の 6ｸﾞﾙｰﾌﾟ 40 名(男 25、女 15、年齢 13-17 歳)を対象に、日常生活、性に関する話題のフォーカスグループインタビュー(FGI)を実施した。②2nd オーディエンス（コミュニティーリーダー）に対する質的調査：群馬県、東京都、神奈川県で教師、地域の NGO 活動家、教育委員会関係者、ブラジル人向けインターネットサイト関係者ら 6 人に個人インタビューを実施した。③若者に対する量的調査:ブラジル政府の認可を受け 13 歳以上の生徒を有する 25 のブラジル人学校の全生徒(約 800 名)に対し、HIV 関連の知識・意識・行動に関する質問紙調査を実施する（現在実施中）。④学校に対する量的調査:現在行われている予防教育内容を把握するために、上記 25 校に郵送調査を実施中、現在までに集まった 13 校に関して分析を実施した。以上の調査の結果、日本に住むブラジル人若者および保護者が言語力不足のため、日本社会から孤立し、情報から完全に疎外されている実態、性行動リスクおよびエイズ教育の不備が明らかとなった。

（3）**HIV 感染者の予防研究**：①HIV 感染者に対する医療従事者のセクシャルヘルス支援に対する意識や自己効力感の向上を目的として、看護師、医師、保健婦、カウンセラーを対象とした研修会を実施した(2 箇所計約 38 名)。介入直後及び 3 ヵ月後に、性の多様性容認、セクシャルヘルス支援積極性・自己効力感等の変化を比較した。介入直後および 3 ヵ月後に、性の多様性容認、セクシャルヘルス支援積極性・自己効力感等すべてに統計的に有意の向上が確認された。②医療機関外で、HIV 感染者のセクシャルヘルス支援の介入法を開発する目的で、プリベンションケースマネージメント法の再検討を行った。



4．考察

我々は、2002 年から若者に関する予防介入研究に着手し、まず一地域で集中的に社会疫学的手法による有効なモデルを(WYSH モデル)開発し、その全国普及を図るという戦略を取ってきた。WYSH モデルは、授業モデルと社会分業モデルから成るが(上図)、幸い授業モデルの成果は、科学性と社会文化的適切性の面で高く評価され、2004 年

度より厚生労働省で一部事業化されると共に、2006年4月の新エイズ予防指針の発行に伴って、WYSH モデルは若者教育のガイドラインとして全国に配布された。また文科省や全国高等学校PTA 連合会からも強い支持を得るに至り、普及の環境は大きく前進した。その結果、益々多くの自治体や学校から研究参加希望が寄せられ、普及の機会が拡大すると共に、授業モデルの進化と多様化が可能となり、それがさらに参加希望の増加につながるという良循環が生まれている。本年度は、教材開発とその多様化の面でも一層の進歩があり、中高生対象の WYSH の授業モデルは教材面でもほぼ完成することができた。今後は、文科省も含めて、WYSH モデルを広汎に普及しフィードバックするメカニズムの検討が必要な段階に達している。また、本年度は小学生のモデルを開発し、WYSH 教育を小中高と系統的な予防モデルとして発展させる基礎が築かれた。一方、保健室の個別指導は、高ニーズの生徒もカバーできるという意味で授業モデルとともに、学校での予防対策の要であるが、まだ有効な個別指導モデルはまだ開発されていない。本年度は、相談内容や養護教諭が抱える問題点について全国調査を実施し、詳しい内容分析を行った。来年度からその結果に基づいた保健室における個別支援モデル開発と研修プログラム開発に着手する。

一方、滞日ブラジル人の若者は、移民の子弟として大きな文化的困難を抱え、また学校、社会からのサポートも乏しいなど脆弱性の高い状態に置かれ、人道上も予防対策の開発が急務である。今年度形成調査に着手したが、学校教育が疎かでかつインターネットが予想以上に普及し利用されているという特殊な事情が判明してきており、ブラジル保健省とも連携しつつ効果的な予防対策の構築を進めていく予定である。

一方、HIV 感染者の予防支援は HAART 時代の今日、エイズ研究の最重要課題の1つであるが、わが国にはまだ有効な手法が存在していない。本研究では、医療従事者のセクシャリティー支援への意識改革という間接介入の手法で研究を進め、すでに短期効果を確認したが、今後は、長期効果とともに患者への影響を評価する。こうした試みから HIV 感染者の予防の展望が開くことが期待される。

5．達成度および今後の展望

1）達成度について：若者研究は、わが国の社会文化に適切でかつ有効な WYSH モデルを創出し普及するという当初の目的を着実に達成するとともに、厚労省と文科省から評価される両省連携の要としての位置づけを獲得した。また、小学生の授業モデル開発、保健室モデル開発、滞日ブラジル人、HIV 感染者への予防介入についても、当初の予定通りの成果を達成し、今後の研究の基礎を築いた。

2)研究成果の学術的・国際的・社会的意義について：本研究はわが国の社会文化に適した科学的予防モデルの創出と普及という重要な課題に取り組んだ社会的意義の高いものであり、また「社会疫学」という学際的アプローチの有効性を証明した学術的意義も高い。また、2006年10月にはこれまでの性行動研究や予防研究の業績に基づいて主任研究者を長とする国連合同エイズ計画共同センターが京都大学に設置されるなど、国際的にも評価を得ている。

3)今後の展望について：本研究により、わが国の若者の予防対策の理論的・実践的基礎が構築された。文科省がその普及に意欲を示し始め、今後は普及機会が一層拡大すると思われるが、そのための持続性のある行政的メカニズムの構築が今後の課題である。 保健室の個別支援モデルは来年度開発し、最終年度には授業モデルと同時に研修を実施、また、社会分業モデルは保健行政がエイズ予防啓発に積極的な自治体を対象に来年度から開発を試みる。また、滞日ブラジル人若者の研究は、来年度から具体的な予防プログラムの開発に入り、HIV 感染者の予防研究については、現在医療従事者側からのアプローチを行っているが、来年度以降は患者側への影響を評価する。

6．結論

わが国の社会文化に適した科学的予防介入モデルの開発と普及という目標を当初の予定通り推進した。また、予防教育の拡張と保健室対策の開発、また滞日外国人や HIV 感染者の予防対策に開発などで前進することができた。

7．知的所有権の出願・取得状況　特になし。

研究成果の刊行に関する一覧表

＜主任研究者及び分担研究者＞

（1）原著論文

1. Kobori E, Visrutaratna, Kada A, Wongchai S, Ono-Kihara M, Kihara M. prevalence and correlates of sexual behaviors among Karen villagers in northern Thailand. (2007) AIDS and Behaviors (in press, doi:10.1007/s10461-006-9167-6).
2. Ma Q, Ono-Kihara M, Cong L, Xu G, Zamani S, Ravari S, Kihara M. Sexual behavior and awareness of Chinese university students in transition with implied risk of sexually transmitted diseases and HIV infection: a cross-sectional study. (2006) BMC Public Health 6:232, doi:10.1186/1471-2458-6-232
3. Hidaka Y, Ichjikawa S, Koyano J, Urao M, Yasuo T, Kimura H, Ono-Kihara M, Kihara M. Substance use and sexual behaviors of Japanese men who have sex with men: a nationwide internet survey conducted in Japan. (2006) BMC Public Health 6:239, doi:10.1186/1471-2458-6-239
4. Zamani S, Kihara M, Gouya MM, Vazirian M, Nassirimanesh B, Ono-Kihara M, Ravari SM, Safaie A, Ichikawa S. High prevalence of HIV infection associated with incarceration among community-based injecting drug users in Tehran, Iran. (2006) J Acquir Immune Defic Syndr. 42(3):342-6.
5. Inoue Y, Yamazaki Y, Kihara M, Wakabayashi C, Seki Y, Ichikawa S. The Intent and practice of condom use among HIV-Positive men who have sex with men in Japan. AIDS Patient Care and STDs 20(11): 792-802, 2006
6. 吉嶺敏子、木原雅子、市川誠一、木原正博. 性行動に関する質問票の信頼性に関する研究. (2006) 日本エイズ学会誌 8:115-122

（2）総説

1. 木原雅子、ラヴァリ SM. 思春期の性行動と性感染症－問題の構造と展望. (2006) 小児科 47: 1320-1326.
2. 木原雅子. 性行動－その実態・社会要因と WYSH 教育の戦略. (2006)学校保健研究 47:501-509
3. 木原正博、木原雅子、サマン・ザマニ. HIV 感染症の動向と今後の予防対策. (2006) 診断と治療 94:18-23.
4. 木原正博、木原雅子. 迫る HIV 流行拡大と対応の幕開け－緊迫するレース展開. (2006) 健 35:24-28
5. 木原正博、木原雅子. わが国の HIV 流行の文脈と展望. (2006) 治療 88:2836-22838
6. 木原正博, Zamani S, 木原雅子. 社会疫学的観点からみたエイズ予防対策. (2006) 病原微生物検出情報 27: 117-118
7. 木原正博、木原雅子他. エイズ予防指針後の取り組みについて. (2006) 厚生労働 6 月号 pp.8-15

（3）著書等

1. 木原雅子、木原正博監訳. ヘルスリサーチのための質的研究方法 (Rice PL and Ezzy D 著). 三煌社, 東京、2006.
2. 木原雅子. エイズの疫学(Q5). HIV Q&A (岡慎一編), pp24-26, 医薬ジャーナル社, 東京, 2006
3. Kihara M, Ono-Kihara M, Zamani S.eds. Selected guidelines for HIV prevention and

testing using rapid tests-for local government initiatives. Ministry of Health, Labour and Welfare, Japan, 2006

4. 木原正博、木原雅子他. 地方自治体のエイズ啓発プログラムのためのガイドライン. HIV 感染症の動向と予防モデルの開発普及に関する社会疫学的研究班, 2006
5. 木原雅子、木原正博他. 地方自治体における青少年エイズ対策/教育ガイドライン－若者の性行動の現状と WYSH プロジェクトの経験. HIV 感染症の動向と予防モデルの開発普及に関する社会疫学的研究班, 2006
6. 木原雅子. 10 代の性行動と日本社会. ミネルヴァ書房、京都, 2006

（4）学会発表等

1. Masako Ono-Kihara, Masahiro Kihara. Young people and HIV/AIDS in East Asia – an endangered future. Beijing Conference on East Asian Regional Cooperation in the Fight against HIV/AIDS, Tuberculosis and Malaria. July 10-11, Bejing, 2006.
2. Masahiro Kihara, Masako Ono-Kihara. Socio-epidemiological context of HIV/STIs epidemic and sexual behavior of young people in Japan. The 2nd German-Japanese HIV Symposium. November 24, Bochum, 2006.
3. 井上洋士、村上未知子、細川陸也、有馬美奈、市橋恵子、岩本愛吉、大野稔子、山元泰之、木原正博、木原雅子. HIV 感染者のセクシュアルヘルス支援のための介入プログラム実施後の評価検討（第 1 報）：プロセス評価の試み. 第 20 回日本エイズ学会学術集会、2006 年 12 月、東京.
4. 細川陸也、井上洋士、村上未知子、有馬美奈、市橋恵子、岩本愛吉、大野稔子、山元泰之、木原正博、木原雅子. HIV 感染者のセクシュアルヘルス支援のための介入プログラム実施後の評価検討（第 2 報）：アウトカム評価の試み. 第 20 回日本エイズ学会学術集会、2006 年 12 月、東京.
5. 岩木エリーザ, 小堀栄子、木原雅子、木原正博. 滞日ブラジル国籍住民の HIV 感染リスク行動とその関連要因. 第 20 回日本エイズ学会学術集会、2006 年 12 月、東京.

II　分担研究報告

1.若者予防グループ

日本の若者に対するHIV予防介入に関する研究

日本の若者に対する HIV 予防介入に関する研究

研究代表者：	木原　雅子	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
研究班員：	木原　正博	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
	Sh. Mortazavi	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
	木原　彩	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
	Saman Zamani	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野
	藤井　久丈	（社）全国高等学校 PTA 連合会
	孫竹　昌幸	（社）全国高等学校 PTA 連合会健全育成委員会
	田崎　さえ子	長崎県西彼保健所
	楠田　為世子	長崎県上五島保健所
	今田　雄次	安芸高田市立甲田中学校
	堀井　登志美	京都府教育委員会
	田井　志津子	国際ソロプチミスト小松
研究顧問	国友　隆一	（株）ベストサービス研究センター

◆研究の背景・目的とこれまでの研究の流れ

厚生労働省のエイズ発生動向調査および厚生労働省性感染症研究班の報告によると、1990 年代半ば以降、10～20 代の若者を中心に HIV や性器クラミジア感染症および淋菌感染症が急速な増加を始め、さらに 10 代女性（15～19 歳）の人工妊娠中絶率も急速な増加を示している。特に中絶率の増加は日本全国すべての都道府県に共通する現象として観察されており、近年、中絶/性感染症はやや増加傾向が落ち着きつつあるが、若者における HIV 感染報告数の増加継続を見ると性の問題はまだ決して楽観できる状況にはないと考えられる。

このような状況の中、本研究グループでは、1999 年以降、若者を対象とした研究を継続してきた（研究リスト参照）。若者の予防介入研究としては、本研究グループでは、特に高校生・中学生の HIV/STD 予防教育について、地域ベース及び学校ベースの予防介入のエビデンスを蓄積する中で、その地域の条件下で実施可能な予防モデルを開発し普及することを主な目的として予防のためのプロジェクトを発足させた。若者に対するこのプロジェクトを以下 WYSH プロジェクトと呼ぶ（WYSH=Well-being of Youth in Social Happiness）。

本予防プロジェクトの研究の流れを下図に示す。西日本の A 県、B 県の高校生を対象とした観察研究を基に、2001 年には B 県内、2 高等学校にて、予防介入のプロトタイプの開発評価が実施された。ついで 2002 年からは、A 県保健行政機関および A 県全域の高等学校との協働で、A 県高校生の性行動調査と予防介入研究を実施し、マルチレベルの予防介入により、高校生に対する効果的な予防教育の開発に成功した。さらに 2003 年度には、A 県内全保健所と希望高等学校との協働により、高校生に対する予防介入研究に加えて、C 市教育委員会との協働で、C 市内の全中学生に対する予防介入研究を実施し、西日本 A 県高校生・中学生に対する効果的な予防介入モデルのエビデンスが得られた。2004-5 年度には、これまで A 県にて予防効果の既に確認された予防モデルを、厚生労働省青少年エイズ対策事業として全国展開を行い、同年、青少年のセカンドオーディエンスのである保護者（全国高等学校 PTA 連合会）と学校関係者（高等学校生徒指導研究会）主体による高校生の性意識/性行動調査が実施された。今年度は、青少年の 2nd オーディエンスである保護者（全国高等学校 PTA 連合会）と学校関係者（県教育言委員会）主体による高校生、中学生、小学生の生活実態調査と保護者の意識調査と、同じく 2nd オーディエンスで特にニーズの高い生徒が訪れる保健室の実態を把握するための全国保健室調査を実施し、さらに厚生労働省青少年エイズ対策事業として、WYSH プロジェクトのさらなる内容改善と全国展開（中学校・高校対象）を継続した。

これまでの調査（量的調査のみ掲載）と予防介入の経緯

（1）日本人全国性行動調査　(1999年)：18-59歳男女5000人、無作為抽出
（2）全国国立大学生性行動調査 (1999年)：大学1・4年男女、26大学、13,645人
（3）首都圏10代カップル調査　(2000年)：10代カップル、街頭調査、602人
（4）地方高校生性行動調査　(2001年)：A・B県全域の高2男女、11,227人
（5）親・子・教師意識調査　(2001年)：B県、生徒6,285人、保護者656人、教師738人
（6）性教育実態調査　(2002年)：小中高、A県：322校、B県：657校
（7）地方高校生予防介入研究　(2002年)：B県2校高校全学年　980人
（8）地方高校生予防介入研究　(2002年)：A県全保健所との共同　A県全域の高２男女、7,935人
（9）地方中学生予防介入研究　(2003年)：　A県全域の高２男女、5,629人、X市中学生男女、7089人
(10) 全国高校生性行動調査　(2004年)：全国PTA連合会と共同　全学年9,587人
(11) 地方高校生性行動調査　(2004年)：C県生徒指導研究会との共同　C県高校生全学年22,805人
(12) 全国中高予防介入研究　(2004年)：厚労省青少年ｴｲｽﾞ対策事業　17府県中学12,615人、高校6,422人
(13) 全国高校生生活実態調査　(2005年)：全国PTA連合会と共同　高2/5755人、親/4574人
(14) 全国中高生予防介入研究　(2005年)：厚労省青少年エイズ対策事業　15府県中学3002人、高校4554人
(15) 地方中高生性意識調査　(2006年)：D県教育委員会と共同　中学全学年15,000人、保護者5000人
高校全学年15,000人、保護者5000人
(16) 地方小学生生活実態調査　(2006年)：E県教育委員会と共同　小学校全学年6,000人、保護者6,000人
(17) 全国保健室調査　(2006年)：1,859校（小学校813校、中学校570校、高校460校）
(18) 全国中高生予防介入研究　(2006年)：厚労省青少年ｴｲｽﾞ対策事業　26都道府県中学8,044人/高校7,901人

◆基本的な研究方針（図 1）

社会疫学的手法（質的方法と量的方法の併用［統合的方法］、社会実験的研究デザイン・社会学的ｻﾝﾌﾟﾘﾝｸﾞ、ｿｰｼｬﾙﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ、行動理論、課題提供型教育等）を用いて、対象集団の文化特性に適合し、かつ現実の社会的文脈の中で持続的に実施可能な HIV 予防介入方法のエビデンスを提供する。

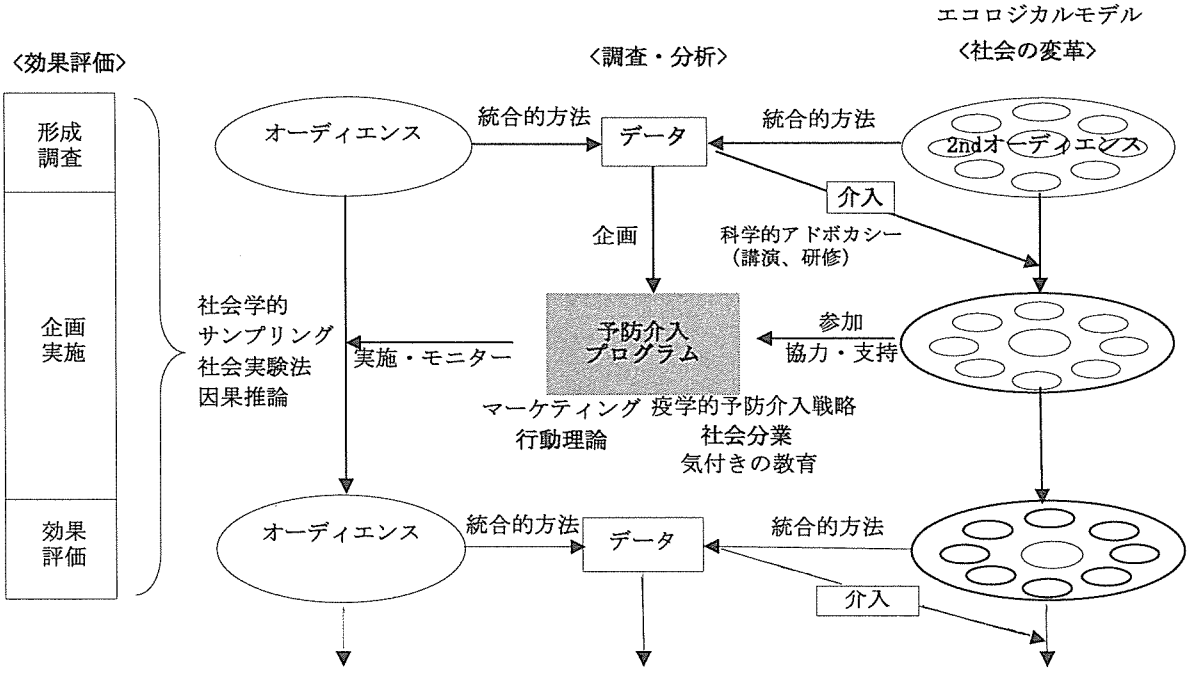


図1. 社会疫学的予防介入の構造

◆研究の基本構造

「研究の枠組み」：ソーシャルマーケティングをベースとした社会疫学的手法をプログラムの基本枠組みとし、個人と社会の変容を目指す。

個人：青少年の知識/意識/行動の変容

環境：社会規範、人間関係、物/サービスの供給、セカンドオーディエンスの知識/意識/行動の変容

① **形成調査**：質的調査と量的調査の併用[統合的方法]。

（1）質的調査（主にフォーカスグループインタビューFGI を使用、質的分析）

（2）量的調査（質問紙調査、統計分析）

② **介入企画（多段階）**：

（1）行動理論：段階行動理論（リスク認知→知識→態度→意図→行動）

（2）マーケティング：Segmentation、4Ps (Product、Price、Place、Promotion), Prompt, Commitment

個人レベル：(保健室での個別指導、保健所の相談窓口、インターネット予防サイト等)

集団レベル：授業（高等学校/中学校の課題提供型授業）

社会レベル：地域的啓発キャンペーン（親子パンフ)、マスメディア（TV、新聞、広報）

③ **実施：**標準化（研修会と教材配布）

④ **モニタリング（プロセス評価）**：介入の実施状況の把握

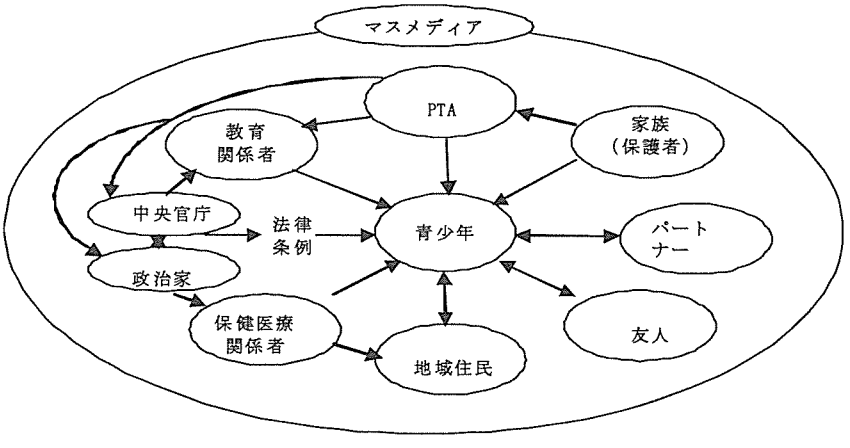
⑤ **効果評価（個人と環境の調査）**：質的調査と量的調査の併用[統合的方法]。

（1）質的調査（主に FGI を使用、質的分析）

（2）量的調査（質問紙調査、統計分析）

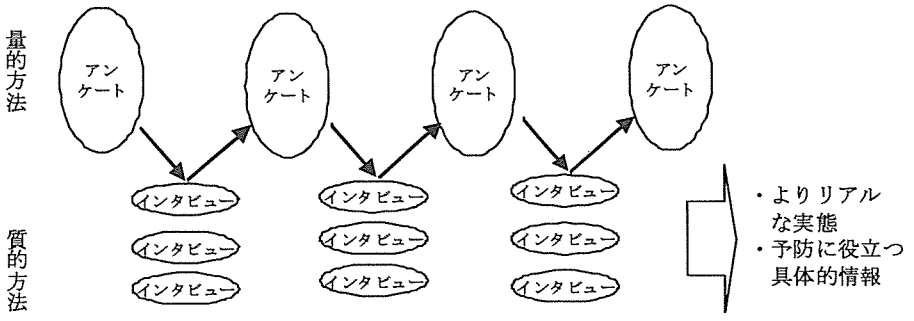
＊ **社会疫学的問題の捉え方**：1st オーディエンスである中高生に対する直接的な調査対策のみならず、1st オーディエンスを取り巻く環境（2nd オーディエンス）にも考慮した対策を考える（図２)。

図 2. 社会疫学における問題のとらえ方（例：若者）



＊　統合的方法（synthetic/combined method）（図 3）：現状をよりリアルに把握するために量的方法（質問紙調査と統計分析）と質的方法（面接調査と質的分析）を併用し、予防に役立つ具体的情報を抽出する。

図 3. 統合的方法
synthetic (combined) method
質的方法と量的方法の併用



若者予防グループ WYSH プロジェクトの 2006 年度の報告概要

1. 観察的研究：1stオーディエンスおよび 2nd オーディエンスに対する横断調査

1-1：1st オーディエンスに対する調査

① A県中学生/高校生に対する性意識調査（A県教育委員会と共同研究）

② B県小学生に対する性教育に関する意識調査（B県教育委員会と共同研究）

1-2：2nd オーディエンスに対する調査

③ 養護教諭に対する全国保健室調査

④ A県・B県の保護者に対する意識調査（A/B県教育委員会と共同研究）

2. 実験的研究：中高生に対する HIV 予防介入研究（学校ベース）

全国の中学生/高校生に対する学校ベースの予防介入研究
（研修会：厚生労働省青少年ｴｲｽﾞ対策事業/文部科学省後援）

1. 観察的研究：（1）ファーストオーディエンス調査

1-1-① 高校生・中学生

【 調査目的 】

高校生/中学生の性に対する意識・態度、性行動を含めた生活実態に関する現状を把握する。

【 調査者 】

(主体) A県教育委員会

(協力) 厚生労働省若者等ＨＩＶ社会疫学研究班

本研究班主任研究者（木原雅子)、A県医師会学校医会長、A県医師会産婦人科医会長、A県教育委員会保健給食管理課指導主事、A県中学校教諭、A県高等学校教諭、A県養護教諭研究会代表、A県健康対策課班長、A県教育委員会健康体育課長を委員として構成される『A県性教育実践調査研究事業連絡協議会』が設置され、A県教育委員会と本研究班の共同で調査が実施された。

【 対象と方法 】

(1) 調査実施時期：2006 年 3 月

(2) 対象：A県の公立高等学校（定時制・通信制を除く）および公立中学校の生徒

(3) 調査方法

サンプリング方法：

① 高等学校（22 校/34 校)

・A県普通科高校リスト、職業科高校リストより無作為抽出

② 中学校（48 校/138 校)

・割当て法（quota sampling)

・A県 30 市町村から学校数に比例して選出

実施方法

無記名自記式質問紙調査、学校における集合調査を実施した。調査は試験と同じ要領で行い（記入中は他の生徒と私語禁止。他の生徒の解答用紙は見ない。全員が調査終了するまで席を離れない)、調査に先立ち、学校関係者により、調査の重要性を説明した。記入後は添付のシールで各自封印し、回収した。

(4) 質問紙と調査項目

（1） 高校生用質問紙（全学年共通)：自記式で 7 ページ、回答所要時間は約 15 分間、主質問 16 問、付問含めて 46 問。質問紙の構成は、①性別・年齢（学年)、②人間関係等、③携帯電話使用頻度、④性情報への暴露、⑤喫煙経験、⑥飲酒経験、⑥その他の各種リスク行動の経験、⑦交際状況、⑧性行動、⑨エイズ/性感染症関連知識、⑩性意識（一般論、自分のこと)、⑪予定外の妊娠/性感染症リスク認知、⑫予防教育への要望など（資料 1)。

（2） 中学生用質問紙 1（中 1/中 2 用)：自記式で 7 ページ、回答所要時間は約 15 分間、主質問 21 問、付問含めて 45 問。質問項目の構成は、①性別・年齢（学年)、②人間関係等、③携帯電話所持、④性情報への暴露、⑤喫煙経験、⑥飲酒経験、⑥その他の各種リスク行動の経験、⑦交際状況、⑧性関連基礎知識、⑨エイズ/性感染症関連知識、⑩性意識（中学生、高校生一般、高校生になった自分のこと)、⑪エイズ/性感染症リスク認知、⑫予防教育への要望など（資料 2)。

（3） 中学生用質問紙 2（中 3 用)：自記式で 7 ページ、回答所要時間は約 15 分間、主質問 22 問、付問含めて 48 問。質問紙の構成は、①性別・年齢（学年)、②人間関係等、③携帯電話所持、④性情報への暴露、⑤喫煙経験、⑥飲酒経験、⑥その他の各種リスク行動の経験、⑦交際状況、⑧性関連基礎知識、⑨性行動、⑩エイズ/性感染症関連知識、⑪性意識（中学生、高校生

一般、高校生になった自分のこと)、⑫エイズ/性感染症リスク認知、⑬予防教育への要望など(資料3)。

(5) 調査参加者数

①高校生参加者数

調査に参加した生徒総数は14,848人(回収率100%)で、そのうち有効回答者14,672人(有効回答率98.8%)、無効回答者176人(内訳:論理的に矛盾する回答が含まれていたため無効としたもの7人、内容からふざけて書いたと思われるもの17人、性別不明のため集計から除外したもの72人、データ入力ミス80人)であった。参加者の性別内訳は、高校1年生4,945人(男子2,297人、女子2,648人)、高校2年生5,014人(男子2,338人、女子2,676人)、高校3年生4,713人(男子2,220人、女子2,493人)であった。

②中学生参加者数

調査に参加した生徒総数は13,295人(回収率100%)で、そのうち有効回答者13,116人(有効回答率98.8%)、無効回答者179人(内訳:論理的に矛盾する回答が含まれていたため無効としたもの7人、内容からふざけて書いたと思われるもの32人、性別不明のため集計から除外したもの53人、データ入力ミス87人)であった。参加者の性別内訳は、中学1年生4,215人(男子2,215人、女子2,000人)、中学2年生4,334人(男子2,264人、女子2,070人)、中学3年生4,567人(男子2,299人、女子2,268人)であった。

(6) 統計学的分析

カテゴリー変数の検定にはカイ二乗検定を用い、変数の分類には主成分分析を、多変数の交絡の調整には多重ロジスティック回帰分析法を用いた。計算には、SPSS ver.12を使用した。なお、検定は時間の制約上、一部に限定して行い、検定を行ったもののみ、その結果を記載した。また、多重仮説検定は行っていないので、注意が必要である。

(7) 倫理的配慮

倫理的配慮として、質問紙の表紙には、匿名性を保つこと、データは統計処理され個人が特定されることはないことを明記した。また、調査開始に際し、この調査は強制でないこと、答えたくなかったら答えなくてもよいこと(白紙の提出可)、記入しなかったことによって成績や学校での評価に影響することはないこと、調査を拒否しても何ら不利益を被らないことを質問紙の表紙に記載し、教諭より口頭でも説明した。また、調査終了後は、対象者自身により、添付のシールで封をさせ、学校関係者は内容を見ないことを説明した。

【調査結果 】

A. 基本的分析（性別集計）

(1) 中学生/高校生の人間関係・生活意識

◈友人との関係（表 1）（表 2）

心から信じられる友人の有無を尋ねた。「信じられる友人がいる」生徒は、中学生では、男女差はなく 70-80%で、男女とも中 1 が最も高く、学年上昇とともに減少傾向が見られた（表 1）。一方、高校生では学年に関係なく、男子では約 70%であったが、女子では 80%前後で女子の方が 1 割ほど多かった（$P<0.001$）（表 2）。中 1～高 3 までの動向を見ると、男子では、中 1 の 80%近くをピークとして減少し、その後は上昇することなく高校でも 70%程度にとどまっていたが、女子では、同じく中 1 では 80%近くと高いが、中 2、中 3 で減少し、高校になると 80%近く再度上昇しており、男女で友人関係の形成パターンが異なる可能性が示唆された。

表 1. 心から信じられる友達がいますか？

		男子	%	女子	%
中学１年生	はい	1745	78.8	1548	77.4
	いいえ	88	4.0	145	7.3
	わからない	376	17.0	305	15.3
	不明	6	0.3	2	0.1
	合計	2215	100.0	2000	100.0
中学２年生	はい	1654	73.1	1466	70.8
	いいえ	139	6.1	160	7.7
	わからない	468	20.7	440	21.3
	不明	3	0.1	4	0.2
	合計	2264	100.0	2070	100.0
中学３年生	はい	1663	72.3	1687	74.4
	いいえ	162	7.0	156	6.9
	わからない	467	20.3	420	18.5
	不明	7	0.3	5	0.2
	合計	2299	100.0	2268	100.0

表 2. 心から信じられる友達がいますか？

		男子	%	女子	%
高校１年生	はい	1614	70.3	2045	77.2
	いいえ	203	8.8	157	5.9
	わからない	476	20.7	445	16.8
	不明	4	0.2	1	0.0
	合計	2297	100.0	2648	100.0
高校２年生	はい	1646	70.4	2054	76.8
	いいえ	190	8.1	177	6.6
	わからない	502	21.5	442	16.5
	不明			3	0.1
	合計	2338	100.0	2676	100.0
高校３年生	はい	1612	72.6	2008	80.5
	いいえ	167	7.5	131	5.3
	わからない	438	19.7	350	14.0
	不明	3	0.1	4	0.2
	合計	2220	100.0	2493	100.0

◈ 保護者との関係（表 3）（表 4）

保護者との会話の状況を尋ねた（中学生：表 3）（高校生：表 4）。「よく話をしている」生徒は、男子では中 1 の 80%をピークに学年上昇とともに保護者との会話が減少し、中 3 以降高 3 までは約 70%と低いままにとどまっていた。、一方、女子では中学・高校変わりなく、85%前後の高い値を維持し、思春期であっても、保護者と頻繁に会話をしている状況が女子の方が男子よりも顕著に高いことが示された（$P<0.001$）。

表 3. あなたは親（保護者）とよく話をしますか？

		男子	%	女子	%
中学１年生	はい	1767	79.8	1698	84.9
	いいえ	190	8.6	117	5.9
	わからない	256	11.6	181	9.1
	不明	2	0.1	4	0.2
	合計	2215	100.0	2000	100.0
中学２年生	はい	1702	75.2	1720	83.1
	いいえ	267	11.8	132	6.4
	わからない	292	12.9	215	10.4
	不明	3	0.1	3	0.1
	合計	2264	100.0	2070	100.0
中学３年生	はい	1649	71.7	1902	83.9
	いいえ	318	13.8	150	6.6
	わからない	327	14.2	211	9.3
	不明	5	0.2	5	0.2
	合計	2299	100.0	2268	100.0

表 4. あなたは親（保護者）とよく話をしますか？

		男子	%	女子	%
高校１年生	はい	1643	71.5	2184	82.5
	いいえ	330	14.4	215	8.1
	わからない	323	14.1	247	9.3
	不明	1	0.0	2	0.1
	合計	2297	100.0	2648	100.0
高校２年生	はい	1672	71.5	2238	83.6
	いいえ	343	14.7	196	7.3
	わからない	323	13.8	241	9.0
	不明	0	0.0	1	0.0
	合計	2338	100.0	2676	100.0
高校３年生	はい	1601	72.1	2122	85.1
	いいえ	327	14.7	171	6.9
	わからない	290	13.1	199	8.0
	不明	2	0.1	1	0.0
	合計	2220	100.0	2493	100.0

◆ 学校関係者への意識（表 5）（表 6）

「先生たちは生徒に平等に接していると思うか」を尋ねた（中学生：表 5）（高校生：表 6）。「平等だと思わない」生徒は、男子では、中 1 の 30%を最低として、中学高校と学年上昇とともに増加を続け、高 3 では 60%近くに達していた。一方、女子でも中 1 が先生への不平等感の最低値ではあるが男子よりは 10%程度高い 40%で、その後は不平等感を持つ生徒が増加し、高 3 では男女の差はなくなり 60%近くと男女とも半数を超える生徒が先生の接し方に不平等感を持っていることが示された。

表 5. 先生たちは全ての生徒に平等に接していると思いますか？

		男子	%	女子	%
中学１年生	はい	816	36.8	501	25.1
	いいえ	670	30.2	808	40.4
	わからない	723	32.6	685	34.4
	不明	6	0.3	6	0.3
	合計	2215	100.0	2000	100.0
中学２年生	はい	716	31.6	328	15.8
	いいえ	914	40.4	1113	53.8
	わからない	628	27.7	622	30.0
	不明	6	0.3	7	0.3
	合計	2264	100.0	2070	100.0
中学３年生	はい	689	30.0	380	16.8
	いいえ	1003	43.6	1206	53.2
	わからない	597	26.0	678	29.9
	不明	10	0.4	4	0.2
	合計	2299	100.0	2268	100.0

表 6. 先生たちは全ての生徒に平等に接していると思いますか？

		男子	%	女子	%
高校１年生	はい	537	23.4	460	17.4
	いいえ	1106	48.1	1268	47.9
	わからない	651	28.3	916	34.6
	不明	3	0.1	4	0.2
	合計	2297	100.0	2648	100.0
高校２年生	はい	443	18.9	370	13.8
	いいえ	1321	56.5	1548	57.8
	わからない	573	24.5	756	28.3
	不明	1	0.0	2	0.1
	合計	2338	100.0	2676	100.0
高校３年生	はい	453	20.4	388	15.6
	いいえ	1252	56.4	1441	57.8
	わからない	513	23.1	663	26.6
	不明	2	0.1	1	0.0
	合計	2220	100.0	2493	100.0

◆周囲の大人との関係（表 7）（表 8）

「話を真剣に聞いてくれる大人があるか」を尋ねた（中学生：表 7）（高校生：表 8）。「真剣に聞いてくれる大人がいる」生徒は、男女とも途中わずかな変動はあるが中学高校を通して同様の傾向を示し、男子では 60%前後であったが、女子では 70%前後と女子の方が男子よりも 10%近く高かった（$P<0.001$）。また、高校では学年の上昇とともにその割合がやや増加する傾向が観察された。

表 7. あなたの話を真剣に聞いてくれる大人がいますか？

		男子	%	女子	%
中学１年生	はい	1331	60.1	1333	66.7
	いいえ	229	10.3	174	8.7
	わからない	650	29.3	490	24.5
	不明	5	0.2	3	0.2
	合計	2215	100.0	2000	100.0
中学２年生	はい	1249	55.2	1287	62.2
	いいえ	292	12.9	257	12.4
	わからない	722	31.9	523	25.3
	不明	1	0.0	3	0.1
	合計	2264	100.0	2070	100.0
中学３年生	はい	1319	57.4	1471	64.9
	いいえ	300	13.0	254	11.2
	わからない	674	29.3	537	23.7
	不明	6	0.3	6	0.3
	合計	2299	100.0	2268	100.0

表 8. あなたの話を真剣に聞いてくれる大人がいますか？

		男子	%	女子	%
高校１年生	はい	1258	54.8	1657	62.6
	いいえ	327	14.2	294	11.1
	わからない	709	30.9	696	26.3
	不明	3	0.1	1	0.0
	合計	2297	100.0	2648	100.0
高校２年生	はい	1375	58.8	1793	67.0
	いいえ	319	13.6	255	9.5
	わからない	644	27.5	622	23.2
	不明			6	0.2
	合計	2338	100.0	2676	100.0
高校３年生	はい	1358	61.2	1801	72.2
	いいえ	286	12.9	228	9.1
	わからない	574	25.9	461	18.5
	不明	2	0.1	3	0.1
	合計	2220	100.0	2493	100.0

◆学校生活（表 9）（表 10）（表 11）（表 12）

「学校は楽しいか」を尋ねた（中学生：表 9）（高校生：表 10）。「楽しい」と答えた生徒は、中学生では男女とも、75%前後と高い割合であったが、高校になると、男子では 60%前後に、女子でも 70%前後と学校生活に楽しさを感じている割合が減少することが示された。その減少は男子の方が顕著であった（$P<0.001$）。次に、「今の学校がいやで転校したいと思ったことがあるか」（中学生）「今の学校をやめたいと思ったことがあるか」（高校生）を尋ねた（中学生：表 11）（高校生：表 12）。「やめたい（転校したい）と思ったことある」生徒は、中学生では、男子では 10%を超える程度と低い値を示したが、女子では 25%前後と男子よりも高く（$P<0.001$）、さらに高校生になると、やめたい割合は大きく増加し、男子で 30-40%、女子では 40%前後とかなりの生徒が現在通学中の学校に対し不満を抱いている様子が観察された。

表 9. 学校は楽しいですか？

		男子	%	女子	%
中学１年生	はい	1682	75.9	1514	75.7
	いいえ	178	8.0	168	8.4
	わからない	352	15.9	316	15.8
	不明	3	0.1	2	0.1
	合計	2215	100.0	2000	100.0
中学２年生	はい	1626	71.8	1462	70.6
	いいえ	238	10.5	212	10.2
	わからない	398	17.6	394	19.0
	不明	2	0.1	2	0.1
	合計	2264	100.0	2070	100.0
中学３年生	はい	1743	75.8	1757	77.5
	いいえ	239	10.4	170	7.5
	わからない	313	13.6	338	14.9
	不明	4	0.2	3	0.1
	合計	2299	100.0	2268	100.0

表 10. 学校は楽しいですか？

		男子	%	女子	%
高校１年生	はい	1413	61.5	1806	68.2
	いいえ	366	15.9	289	10.9
	わからない	517	22.5	551	20.8
	不明	1	0.0	2	0.1
	合計	2297	100.0	2648	100.0
高校２年生	はい	1357	58.0	1788	66.8
	いいえ	473	20.2	341	12.7
	わからない	508	21.7	544	20.3
	不明			3	0.1
	合計	2338	100.0	2676	100.0
高校３年生	はい	1396	62.9	1781	71.4
	いいえ	413	18.6	296	11.9
	わからない	410	18.5	414	16.6
	不明	1	0.0	2	0.1
	合計	2220	100.0	2493	100.0

表 11. 転校したいと思ったことがありますか？

		男子	%	女子	%
中学１年生	はい	309	14.0	457	22.9
	いいえ	1742	78.6	1377	68.9
	わからない	156	7.0	162	8.1
	不明	8	0.4	4	0.2
	合計	2215	100.0	2000	100.0
中学２年生	はい	293	12.9	542	26.2
	いいえ	1803	79.6	1301	62.9
	わからない	167	7.4	224	10.8
	不明	1	0.0	3	0.1
	合計	2264	100.0	2070	100.0
中学３年生	はい	270	11.7	514	22.7
	いいえ	1845	80.3	1542	68.0
	わからない	177	7.7	207	9.1
	不明	7	0.3	5	0.2
	合計	2299	100.0	2268	100.0

表 12. 転校したいと思ったことがありますか？

		男子	%	女子	%
高校１年生	はい	701	30.5	980	37.0
	いいえ	1336	58.2	1361	51.4
	わからない	258	11.2	304	11.5
	不明	2	0.1	3	0.1
	合計	2297	100.0	2648	100.0
高校２年生	はい	872	37.3	1078	40.3
	いいえ	1247	53.3	1367	51.1
	わからない	217	9.3	227	8.5
	不明	2	0.1	4	0.1
	合計	2338	100.0	2676	100.0
高校３年生	はい	751	33.8	924	37.1
	いいえ	1268	57.1	1402	56.2
	わからない	197	8.9	167	6.7
	不明	4	0.2	0	0.0
	合計	2220	100.0	2493	100.0